

# 草庵仏教

第143号  
(発行日)  
2002年5月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX (0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座 (念仏堂)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会 (念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 聞法の留意点

**Z** 「友人の息子のK君は身体に障害があつて、自由に身体が動かないのですが、大学を受験し合格して現在大学生活を送っています。そのK君の書いた文章を手元にもっています。読んでいろいろ考えさせられます」

**D** 「どういふ点にですか」

**Z** 「内容はいいものです。ざつと申しますと、日々生きていく中で、本当に有難いと思うのは、物よりも人のやさしい心に入れた時だと言っています」

**D** 「K君のように身体が不自由だと、人の親切がことに身に沁みて有難く感じるだろうと思えますが、人のやさしい心に入れたときの嬉しさや有難さはだれしもの感動だと思えます」

\*

**Z** 「K君はこういう大事な事も言っています。障害者とか健全者とか二つに分けるけれども、そんなことは重要なことではないこと。その証拠に、自分と心が通う友だちがいたとしたら、その友だちと接するときお互いが障害者とか健全者とかいちいち考えるでしょうか」と言っています」

**D** 「実際そうですね。私の親戚にも重い障害をもった人がいますが、あつているときに彼を障害者として意識的に分けること

はありませぬね。ただ身体が不自由で大変だろうなあと思いがらつきあつていただけで、とくに意識して分けませぬよね」

**Z** 「この点についてK君はさらに、へきつとだれもそんな分け方をせず、個人個人を一人の人間として見ているはずですよ」と言っています」

**D** 「そうですね」

\*

**Z** 「そして、障害者は確かに多くの手助けを必要としますが、でもだれだつて他の人々に支えられて生きていける」と言っています。障害者だけが人の助けがなくては生きられないのではない、人はだれでも人の助けなしには生きられないと指摘しています」

**D** 「実際そうですね。食べるお米も住居もずいぶん多くの人の手がかかっています。私などは一粒のお米も自分では作れない。人の作つてもらつたものをいただいています。また歯が痛くなれば歯医者さんで直してもらいます。自分では直せません。世話になる人と世話をする人とを二つに分けることは無論できません。その時々縁でお互いに世話したり世話になつたりしていますね」

**Z** 「ですから、障害者だから、手助けがいる」とは勿論言えな

い。もし言うとしても人よりも人の手が多くかかるということでしょうが、だれしも「私は人の世話にはなつてないし、これからはそれほど人の世話にはならない」と言える人はいません。今は元気で、縁が来れば寝たきりにも痴呆にもなります。そのうなるといやでも多くの人の世話になります。ただ現在はそれほど人の世話にたからなくてすむ縁をいただいているだけ、というのが事実だと思ひます」

**D** 「そうですね。だれしも縁が来れば何時でも身体が不自由になり、日常生活で多くの援助を必要とする状況になりますね」

\*

**Z** 「N君は、病気で障害をもつようになって泣いたことが何度もあり、今でも泣くことがある。しかし、病気のおかげで出会えた人もあり、出会えた幸せもある。これは病気というマイナスによって「否定できないし消すことも出来ない」と言っています」

**D** 「病気によって出会えた幸せがあると言ふのですね」

**Z** 「ええ、それまで「病気なんかマイナス以外の何ものでもない」とばかり思っていたけれど、病気になつたがゆえに出会えた幸せがあると。そして与えられ

た人生を一杯生きていけば「病気であることに感謝できると思ふし、いつかきつと心の底から病気に対して有難うと思えるように歩んでいきたい」と結んでいます」

**D** 「病気は辛い、病気は不幸で、これさえなかったら」とばかり思つていたけれど、病気のおかげで出会えた幸せがある。いわば病気というマイナスをプラスに受けとめることができるように生きたいといふのですね」

**Z** 「そうですね」

**D** 「尊い人生態度だと思ひます。N君が今後どういふ歩みをしてくださるかですね」

\*

**Z** 「N君は真宗を学んでいます」

**D** 「そうですね。N君のような生きることが容易でない人生にたいして前向きな態度は尊いですが、ただそうした場合は、N君が真宗にご縁があるようであれば、もう少しついでで考えてみたいと思ひます。世間の人生観としてなら、N君の姿勢には何も申し上げることはありません。そこをもう一つ真宗の教えに照らして見た場合、N君が真宗の教えを聞法して自分の病気になりたたい、なるう」と言われることをあえて問題にしたいのです」

**Z** 「自分の身にふりかかる不幸や災難さえ、これを「尊いご縁、有難いこと」と受け取るように

なるのが真宗信心のあり方と私も思っているのですが」

**D** 「ええよくそういう話を聞きます。これは真宗にかぎらないと思います。私の知人が知っているクリスチャンで、難病にかかって生涯床を離れることのない女性がいる、不幸としかいえないような自分の身を有難いと受け取っているそうです。彼は彼女のような信仰を持ちたいと話していました」

**Z** 「そういう宗教の話はときどき聞きますね。癌がんになって助からないような人で、癌がんも神様の贈り物といたただいている」という話を聞いたことがあります。先日もある真宗の先生が、(人間として最大の、そして最後の仕事とは、私は『有難う』と死ぬる人になることだと思えます)と書いておられました」

**D** 「ただ、私はこう思うのです。こういう有難い話や尊い話は結構なのですが、こういう話を聞いた私たちはともするとそういう姿になるのが真宗のまことの信者であると、そう受け取るならそこを問題にしたいのです」

**Z** 「N君が真宗を学んで、自分の病気をも(有難いと感謝できるようになりたい)という、これはやはり問題があるのでしょ

うか」  
**D** 「妙みょう好人こうじんなどの尊い話を聞いた私たちが(ああならねば信じたいとえない、あれでなくては真宗信者とはいえない、私もあ

あなりたい)という風に受け取るなら、弥陀の本願を聞き損そとなう場合もあります」

**Z** 「どうしてですか」  
**D** 「真宗の聞法を重ねて、病気をすら有難いと受け取れるような人間になろうとすること、そこになお自力じきり執しやく心しん(自己過信)があると言えないでしょうか」

**Z** 「(ああなりたい、ああなろう)と、何か有難い状態を理想化して、それに向かって努力していく姿ですね」

**D** 「これは真宗の聞法プロセスの中でよくあることです。(なるう、なれる)という自力執心に引きずられて一生を送ってしまうことも少なくありません」

**Z** 「さきほどこういう姿は、弥陀の本願を聞き損そとないかねないといわれましたが、それはなぜですか」

**D** 「まず最初に確認しておきたいのは、真宗の教えは弥陀の本願を聞きし念仏申していく道です。ですから何を聞き、何を信じるかという弥陀の本願です」

**Z** 「弥陀の本願を聞き損そとなう場合があるというのはどういうことですか」  
**D** 「聞き損そとなうというか、本願を十分に聞いていない場合があるります。だから、(病気も有難く感謝したい)とか(死ぬことをも有難く思いたい)とか、(難病も仏のお与えといただけるようになりたい)というのは、聞法

すれども(どうかなるための聞

法)になつてしまい、(どうかなるうとする聞法)になり得えます」

\*

**Z** 「では弥陀の本願をどう聞かせてもらうのでしょうか」

**D** 「阿弥陀仏の本願は私たちに病気や死ぬことを有難く受け取

ることを求めてはられません。(そのままなりを助けるで、ただ称えよ)と仰せられるのです」

**Z** 「なぜ、(有難いと受け取れよ)と阿弥陀仏は仰せられないのでしょうか」

**D** 「阿弥陀仏は凡夫の心を当てにされないからです。たとえばN君の場合、真宗の聞法を続けていく中で、自分の病気さえも有難く感謝する心が起こる場合

もありましよう。それはそれで結構なことです。しかし、有難いと思ついても病苦が余りにきついときに(もう死んでしま

いたい)というような思いが起こらないとも限りません。聞法を重ねていっても病気が有難いどころか嘆くような気持ちが起こることがあるかもしれませぬ。

もし(病気を有難いと受け取れるのが真宗信心)だと思ひこんでしまいますと、真宗の信心を見失みしつたり、広大な仏の慈悲に気づかず終わつてしまう可能性があります」

**Z** 「確かに、身体の調子がいい時には感謝が出来ても、苦痛が激しいときは感謝どころか病気をうらむ心が起こらないとは言えませぬね」

**D** 「ええそういう弱い心の持ち主が私ども凡夫ではないでしょ

うか。ところが阿弥陀仏は、こ

うした状況の良し悪しにふり回されてしまいがちな凡夫の心を

よくよくご存ぞんじになつた上で、(汝の心は当あてにしない。汝の心はどうあれ、そのまま我が名を称えるばかりで助ける、その他に何もいらぬ)と仰せ下さる本願です。たとえ病気を嘆きうらむ心が起こつても、私の心の有様をすでに勘かん定じやう済みで、(そ

んなたよりないお前だから、私がついている。全面的に引き受けるから、そのままなりで念仏申すばかりでよい)との大悲撰せつしゆ取のお心が弥陀の本願です」

**Z** 「そうするとN君の場合、病気を感謝できるようになつたりした人間になろうとすると、いつまでたつてもそうなれない自分

分に失望し救いの道を自分から閉ざしてしまいかねませぬね」

**D** 「ええそうですね。ですから本願の思し召しを十分に聞くことが大切です」

**Z** 「たとえば(自分の癌がんを神や仏の贈り物)という話を聞いて、私もそう受け取れる人になりた

いと思ひ、そうなることが救われたしるしであると理解すると、そうならない壁かべにぶつかつて(神も仏もあるものか)とならないともかぎりませぬね」  
**D** 「そうですね。死ぬ間際まぎわに有難いと思つて死ぬるようになりた

そう思えなくては真宗の信心とはいえないという風に受け取る

と、私の側から広大な信心を限定してしまひます」

**Z** 「凡夫の側の態度の如何によつて、救いが決まるのではないのですか」

**D** 「そうですね、そこが大事なところですよ。私どもの心のあり方や態度の如何に一切かわりなく、阿弥陀仏が(そのままなり

の汝を助ける)との阿弥陀の決定によつて決まることです。その決定を聞き受けているばかりを信心というのです。ですから、死ぬ間際まぎわに(有難い一生であつたと思えるか、思えないか)に

用はないのです。ただ仏のお心を仰まかさばかりです」  
**Z** 「妙みょう好人こうじんや尊い信者の話などをよくお説教で聞きますし、お話し下さる先生の方も好んで

さるので、ついついそういう有難い信者にならねば信心を頂

たとはいえないかの如くに思つてしまふのですか」

**D** 「ええそうですね。ですから特別有難い信者の話を聞くのは結構ですが、私が救われるのは弥陀の本願によつてであり、本願のお心をよくよく聞きつけることが基本的にもっと大事なことです。そこをはずすといつ

のまにか自力の計はかりらいに陥おちつてしまひます」

# 歎異鈔 第十二章第二講

一文不通にして、経釈のゆくじもし  
らざらんひとの、となえやすからん  
ための名号におわしますゆえに、  
易行という。学問をむねとするは、  
聖道門なり、難行となづく。あやま  
つて、学問して、名聞利養のおもいに  
住するひと、順次の往生、いかがあ  
らんずらんという証文もそうろうぞ  
かし。

(歎異鈔第十二章より)

現代語訳(文字の一つも知らず、教典な  
どの筋道もわからない人々が、容易に称  
えることができるように成就された名号  
ですから、念仏を易行というのです。学  
問を主とするのは聖道門であり、難行と  
いいます。学問をしても、それによつて  
名誉や利益を得ようという誤った思いを  
いだく人は、この世の命を終えて浄土に  
往生することができるかどうか疑わしい  
ということの証拠となる文もあるはずで  
す)

\*

ここに易行と難行ということが出てき  
ます。浄土門いわば浄土の教えでは浄土  
へ生まれる行は易行であり、浄土門以外  
の聖道門(南伝仏教・天台・真言・禪な  
ど)では行は難行であります。聖道門の  
仏教では覚りへの道は総じて「戒・定・  
慧の三学」を修めていく道であります。  
戒律をたもつたり、禪定を修するなり、  
学問をして智慧を磨くなりして、覚りを

成就しようという自力修行の道でありま  
す。聖道門の中の諸宗には禪定を主とす  
る禪宗、あるいは戒律を主とするテーラ  
ーバタ(南伝仏教)、学問を重要視する  
法相宗などの特徴はありますが、総じて  
「戒・定・慧」の三つを修する道であり  
ます。どの行も易しい行ではありません。  
すなわち出家して厳しい戒律をたもつ、  
あるいは坐禅瞑想に励む、あるいは仏教  
の深い道理を理解するために、多くの経  
典や高僧方の書物(論釈)を学習してい  
く修行などがあります。

\*

聖道門に対して浄土門は万人の救済を  
本旨とする弥陀の本願に信順する道です  
から、弥陀の救いは仏教の学問の有無に  
よつて人を選別しないのです。いわば難  
しい学問などとても修得することの出来  
ない愚夫愚婦を本として救済したもう弥  
陀の本願によつて救われる法門が浄土門  
なのです。その広大な仏心大悲は、「我が  
名を称えるばかりで浄土に生まれしめん」という念仏往生の本願(第十八願)に表  
明されています。

阿弥陀は南無阿弥陀仏の名号を選び  
とつて、「十声なりとも名号を称えよ、必  
ず浄土に生まれしめる」(乃至十念若不生  
者不取正覚)と誓い、その誓いの御名を  
私たちに与えてくださり、「これを称えよ、  
助けるぞ」と仰せ下さるのです。

「名号を称えるばかりで助ける」と与  
えてくださるお念仏の行は、口にナムア  
ミダブツと発音するだけの至つて易しい  
行(易行)です。ですからこれはいつで  
も、どこでも、だれでもが行じやすくま  
た持続しやすいのです。これに比較して、  
難解な仏教の学問を修得していくのは難  
しい修行(難行)です。それゆえ学問を

修めることを必要なこととするのは聖道  
門だと言われるのです。

ではなぜ阿弥陀仏は易行である称名念  
仏を選んで、これでもつて私どもを救お  
うとされるのでしょうか。それは法然聖  
人が申されるように

「弥陀如来、法蔵比丘の昔平等の慈悲  
に催されて、あまねく一切を撰せんが  
ために、造像起塔等の諸行をもつて  
往生の本願となしたまはず。ただ称名  
念仏一行をもつてその本願となしたま  
へり」(選択集)

といわれるように、弥陀は一切の衆生を  
平等にさわりなく救いたいという廣大無  
辺の慈悲から、造像や起塔や学問や坐禅  
や布施や忍辱などの難しい行を救いの条  
件とされず、だれでも出来る称名念仏を  
選び、浄土往生の行と誓われたのでした。  
造像や学問などの難行はだれも出来る  
行ではありませんから、できないものは  
救いから漏れてしまい、一切衆生を平等  
に救おうという慈悲の心にかないません。  
ですから易行中の易行といつていい称名  
念仏を弥陀が選ばれたのは一切の衆生を  
救おうという広大な大悲の智慧から出た  
ものです。私たち凡夫の考えから出たも  
のではありません。そういう意味からも  
弥陀が「我が名を称えよ」と仰せられる  
お心のなかに、いかなる者、いや最悪の  
者をも見捨てないという大悲の涙が感じ  
られます。

\*

なおここで、歎異鈔の著者が相手にし  
ているのは、聖道門仏教の人たちという  
よりも、むしろ浄土門に帰依しながらな  
お、「ただ念仏申しているだけではだめだ、

念仏について学問して、念仏で助かる深  
い道理を学んで了解しなければいけない」と  
言い立てる人たちへ「せっかくな浄土門  
に入りながら、学問を往生の足しにしよ  
うとするのは聖道門と同じ自力の沙汰で  
ある」と批判されているのだと伺えます。

\*

念仏の深い道理を学ぶことはいくらし  
てもいいし、それは教えを弘める上で役  
に立ちましょう。けれども、念仏で助か  
る深い道理を理解できなければ、単純に  
本願に順じて念仏を称えても浄土往生は  
できないと言いつてるのは仏のおぼしめ  
しに背いています。本願のお念仏は万人  
に「汝の力では救われがたい。そんな汝  
をソノママなりで助けるから、ただ念仏  
してこい」と仰せられる不可思議な誓い  
です。この不思議な誓いを「こんな私を、  
ようこそ、ナムアミダブツ」と信じるば  
かり、称えるばかりです。わけも理屈も  
入れる用もなく、ただ単純に本願を受け  
入れているばかりのところ救いの光を  
浴びるのです。不思議なことです。です  
から、「念仏で助かる道理やわけを知らな  
ければ本当には助からない」と言うので  
はさらさらありません。それなればこそ、  
全く学問のない愚かな者も救いにあずか  
ることが出来るのです。

そして救いのであった上から、いかほ  
ど本願念仏の深い道理を学ぶも良いので  
す。それは人々を教えに導く上で役に立  
ちます。聖人は法然聖人に初めてお会い  
して、本願念仏を「一文不知の愚鈍の身  
になして、尼入道の無智のともがらに同  
じて」(一枚起請文)お受けになりました。  
その上で生涯かけて、お念仏の道理を尋  
ねていかれました。その成果は『顕浄土  
真実教行證文類』として残されておりま

# 高僧たちの中の親鸞

日本の歴史には数多くの高僧が現れました。高僧方の中で、例えば空海、道元、忍性、日蓮などの高僧はすべて自利行と利他行を自らの上に実践していった方たちでありましょう。自利行とは自らの覚りを実現するために修行すること、利他行とは他の人々を救済して、覚りへの道に入らしめることです。

空海は自らの修行をしつつ、弟子を育て、民衆の福祉のために社会事業を行い、学問文化に貢献しました。道元は自らの厳しい修行をなしつつ、利他行をするためには先ず自利としての修行が大事であるという観点から、自利利他のできる人材の養成に力を尽くしました。忍性は、律宗の僧としての厳しい戒律を保って自利の行を励み、利他の行として貧民の救済、病者の救済のために驚くほどの行蹟を残しました。日蓮は自らへの厳しい修行をしつつ、国家の安泰を願って獅子奮闘しました。

こうした高僧方はまさに自己の覚りへの修行をなしつつ、人々を救うていくという、いわば「世の精神的あるいは社会的な指導者」として尊ばれ崇められるべき偉人であります。

さて、それに比して親鸞（法然を含む）はどういう人だったのでしょうか。親鸞は九才で出家し、二十年間かけて自利と利他を完成すべく比叡山で修行に励みました。しかるにその結果、親鸞は自らの力にては自利としての自らの救いを実現

できず、いわんや他者を救うという利他のなし得ない、そういう我が身であると痛感されたのでした。自利にも

利他にも無力無能であって、無窮の闇にすべりゆく外なき身であると、人生に破綻してしまわれたのです。そうしたとき、法然に出会い、法然から聞かせていただいたのが弥陀の本願でした。法然の仰せは「ただ念仏して弥陀に助けられよ」という、すなわち自己が救われる自利も、

他者が救われる利他も、ひとえに弥陀の本願力によって実現せしめられるのであるから、弥陀の願力に助けをいただく外に我らのような者の助かる道はないというおぼしめしでした。弥陀の本願力によって自利利他されるといふ師の仰せに親鸞は驚喜し、そこに大いなる救いの光を見いだしました。

それゆえそれからの親鸞の生涯は、他の高僧方のように世の中を救済する側、指導する側に立つのではなく、いわば救済される側、導かれる側に身をおいて生きられたのです。そのことは、おのずと社会の底辺に生きている人たちと生きる座を共にすることになりました。

他の高僧方の生き方はいうまでもなく尊く敬われるべきものです。しかし、私自身はこうした偉大な高僧方のどなたに ついていくことができるでしょうか。中には道元のように先ずは自身の覚りを求めて厳しい坐禅修行に打ち込もうとする人もあります。あるいは忍性のように献身的な慈善活動によって他者の苦難を救おうとして生きる人もあります。あるいは日蓮のように題目の行によって自らを救い、社会国家を浄土化するべく

世の先頭に立って指導していかうとする人もあります。

しかし自己一身すらもてあましてしまう愚鈍な私自身はたしてどの高僧の歩まれた道をたどることができるでしょうか。そうなると、どこまでもただの凡人でしかない私と道を共にしてくださるのは親鸞の外には見あたりません。親鸞は私にとってそのような高僧なのです。

(丁)



満作

## 〈住職つれづれ雑感〉

今年の4月は桜の花もあつという間に散り、例年に比べて雨も少なく、暖かいように思う。お参りの途中、家の廻りに咲いている花々が美しく、見て通るだけでも楽しいものである。花の4月も直ぐに去っていくのが惜しい。お参りのため武庫川の河川敷を自転車で走るのは気持ちのいいものである。河川敷ではゲートボールをする人、サイクリングをする人、弁当を広げている人たちがいて、みんなの顔もなんとなく気分が良さそうである。ただ、気になるのは家のない人がテント生活を河川敷でしていることである。経済不況のせいかな年ごとに多くなっている。何とか政治の力ではないものかと思う。ただ今年の冬は厳寒の目が少なかったのは幸いだった。何か私に出来ないかと思うが、力も勇気もない。

最近孫の姿を見るのが楽しみである。こういう楽しみがこの歳になつてあるとは知らなかった。とにかく成長が早い。一週間ごとに変化が目立つのである。孫の世話をしているのか、孫から慰め

